
魔光伝

なみな

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔光伝

【Nコード】

N6103V

【作者名】

なみな

【あらすじ】

魔力の存在により作り上げられた世界が存在していた。その世界は、人間、魔人、魔物で分類される生き物が住まい、全体の三分の二の生き物には生まれ付き魔力という力が備わっている。それは「魔光界」と呼ばれる世界。魔光界は闇と光に二分されている。『魔』の世界に本当の平和などあるのだろうか。そこに、一人の少女が大地に降り立つ。謎多き世界で繰り広げられるバトルファンタジー。

プロローグ

最初は、漫画を描こうかと思っていた。

小学三年生の頃から考えていた職業は漫画家だけだった事と、私が本当に熱中出来るものが『絵』しかなかったからだ。

しかし私はいつからか気が付いていた。私は漫画家には本気でなろうなど思っていない事を。

漫画家になると頭の中で意気込んでいる割には漫画の絵が上手ではない。にも関わらず絵の上達の為の練習をしない。

怠けていたのは絵だけではなく、勉強も同じだった。

中学二年生の秋まではキッチンとやっていた気がする。けれどその後は急に何もかも冷めてしまった。そうなってしまったのが受験生となる直前だったから勉強を怠けて親に心配されてしまったものだ。だから書こうと思ったのは、本当にただの気紛れだった。

中学三年生の秋。何となくキーボードを打って、気が付いたら物語は始まっていた。別に何も考えずに打っていた訳じゃない。いや、「小説として」言うならば何も考えずに文章を書いていたのだろう。小学六年生の時からだっただろうか。私は頭の中でずっと温めてきた物語があった。若いから、というのもあると思う。ジャンルはファンタジーで、魔法やら超能力やら怪奇現象やらの設定を考えたとある有名なゲームのストーリーをモチーフとした、というより殆ど同じストーリー展開の中で、キャラクターだけ自作というだけの空想。妄想とも呼べるかもしれない。

そのように何気なく考え、何気なく文章にしてみた小説。そして、登場人物達。そんな安易な物語を、書き続けていられる筈がないと思っていた。

しかし漫画のようにはいかなかった。

そんな小説を、私は書き続けていられた。十ヶ月もの間。

勿論内容はありきたりで、とても上手い文章とはいえない駄文だ

ったけれど。

しかしお陰で気が付いた事がある。

私はこの物語がとても好きになっていったんだ、という事。

そして私が本当に熱中していたのは、物語を作る事だという事を。また安易な考えとなってしまうけれど、今度は私は「小説」に興味を持ち始めたのだ。

元々漫画だけでなく小説も読むのは好きだった。書こうなどと、物語を空想し始めた頃は考えてもない事だったけれど。

空想だけで終わらせるつもりだったものを、書き始めて、このお話を好きになっていった事に気が付いたのが今である。

だからこそ、私はこの物語を本当のカタチとして完成させたいと思う事が出来る。

自分には漫画家より小説家の方が向いているんだ、という浮かれた考えが無意識に心の中で生まれているかもしれない。それでもこの物語を完成させたいと思う気持ちは本心には変わらない。

もう一度、私は最初から、今度はしっかりと土台を考えて物語を作り始めようと思う。

題名は、私の空想の中で物語が生まれた時から決まっている。

『^{まこうでん}魔光伝』だ。

第一話（前書き）

創世の1ページ目を、どうぞお開き下さい。

第一話

この世には、闇の世界しかなかった。その世界を、現代の人々はこう呼んでいる。『ドラデイス』と。

ドラデイスは闇と化した生き物、『悪魔』が生息し、悪魔が世界を統べ、悪魔によって支配されるしかない世界だった。

ところが、ドラデイスで生まれた内の一匹である悪魔が次第に、闇という存在を恐れるようになったのである。彼の名は『アドス』。それは後の魔光界の神の名となる。

ドラデイスで生きる自身を失ったアドスは、やがてドラデイスから脱獄した。

行き場を失った彼は、光の世界の創造を思い付いた。それはドラデイスとはまた別の次元の世界。

アドスは一つの大地に、水を、土を、緑を与え始める。そして作り上げた自然界を守らせる存在が必要だと考えたアドスは、『人類』と『獣』を創造させた。

光の世界の創造に成功したアドスはやがて、天使という、すなわち悪魔と対になる生き物へと転生した。だがそれでも彼の内には悪魔の力が残ったままだった。そこで彼は、体内に残る悪魔の力を浄化すべく、世界に自らの魔力を注ぎ込んだのだ。

こうして『魔光界』が誕生し、アドスは光の創造神となって天へと上った。

簡単なお伽噺を読んで聞かせるような口調で、陽^{はる}亜は自らの膝に手を乗せている幼い我が子に、ティアナ教に則^{のっと}った魔光界の創造神話を語った。

「面白かった？」

「うん。スゴイ。スゴいわ！」

娘の波菜はその場で兎の様にピョンピョン跳んでみせた。彼女のピンク色の髪が上下に揺れる。

「『あどすさん』っていい人だね」

「フフ、そうね」

陽亜は満足気に波菜の頭を掴まえて、優しく撫でる。

陽亜が居るここは、信仰によって築いた教会だが、幾分小さいものだった。さすがに小屋と言う程狭くはない。それでも建築された当時は、数十人は入っても余裕な程だった筈だ。

大きな教会を保てなかったのは、陽亜が崇める神、アドスのティアナ教を信仰する修道士が少なくなってしまったからだ。

ある時、ティアナ教徒とは別の教徒が言った。

『光は光。闇は闇だ。この二つが共存する事などない』

それはアドスが元は悪魔だという事からだ。その言葉に、妙に納得してしまったティアナ教徒の多くが別の宗教に移ってしまったのだ。

お陰で修道士がめつきり減った教会の体裁は危うくなって、広々としていた礼拝堂も一気に小規模なものとなり、天に届くのではないと言える程高かった天井も、今ではごく普通の、民間人の家庭の家と並列になる程の低さとなっていた。

今はその教会に残っている修道士は、陽亜と、夫の風人^{ふうじん}だけだ。

「ねえ、おかあさん」

陽亜がふつと溜息をついた途端に波菜の声が聞こえて、ボーツとしていた意識を現実に取り戻す。

「何？ 波菜」

「あくまさんって、わるい人なのかしら？」

おそらく今聞かせた神話の初めに、悪魔が闇の住人という所に疑問を持ったのだろう。

「そんな事ないわ。アドス様の元の姿だもの。『悪魔』という名だけで悪いと決めつけるものではないのよ？」

「うん！」

波菜は元気良く頷いて、了解してくれた。

すくなくとも、陽亜が未だにティアナ教を信じて止まないのは、この宗教が光と闇の架橋になると、強く感じているからだ。

アドス神が今では多くの人々に邪神と呼ばれても、陽亜がこの世に生まれてきてからずっとアドスに捧げ続けた祈りの心。彼女のその心が途中で緩む事などないのだ。

それを、娘の波菜に受け継いで欲しい。唯一の一人娘はまだ五歳だ。だがこの教会を後世へと継ぐ事が出来るのは波菜しか居ないだろう。だからこそ遅かれ早かれティアナ教の創造神話を知って貰わなければならなかった。

陽亜は腰掛けていた木の椅子から立ち上がり、両手の指を交差させてギュツと握る。横でその動作を見ていた波菜も、母に習ってお祈りの姿勢をとる。陽亜は波菜の方を片目で盗み見て、密かに笑いかけた。

突如、居間のドアがバンツと音を出して開かれる。

音に驚いた波菜は跳びあがって、慌てて陽亜の背中に廻り込んで姿を隠した。

「凧、どうしたの？」

「あ、ああ。驚かして済まない」

「おとうさん」

波菜が父の下へと駆け寄る。

凧人は娘の両肩に手を置いて、視線を合わすべく屈んだ。

「波菜、今からシャドウ君の家に遊びに行きたくはないか？」

凧人がそう言うと、波菜は一瞬で満面の笑顔を作り出した。

「いく！　いくわ！」

「よし」

凧人が頷いて立ち上がる。

「じゅんぴしてくるわ！」

「行って来い」

波菜が騒々しく居間を出て勢い良く階段を駆け上がり、二階の自

室へと直行する。居間の丁度真上が波菜の部屋の為、やたらドタバタと音が響くのが聞こえる。

「……で、どうしたの？」

陽亜がもう一度疑問を投げかけた。凧人は思い出したかの様にハッとなる。

「そうだった。外を見てみる」

「外？」

白いレースのカーテンを引いて、窓から外の景色を窺う。

すると、目に飛び込んできたのは、今までで見た事もない程黒い、大きな雲が空を泳いでいるという奇妙過ぎる光景だった。

第二話

「黒い雲……」

窓越しで一目見るだけでは、そうとしか呟けない。

暗雲と呼ぶには黒過ぎる上に、動きが通常の雲の動きより速いように見える。教会に当たる日の光から、空全体を覆う程大きくはないと分かる。

いきなり訝しい光景を目に留めた陽亜は、暫くカーテンを掴んだまま硬直する。

現に今、凧人は急いでやって来た。まさか？

得体の知れない予感が陽亜を襲う。

陽亜は凧人の方を見遣る。すると、

「波菜、まだかー？」

凧人は腰に手を当てたまま階下から二階の自室に閉じ籠った娘を呼び掛けた。彼に「スコップが見付からないの〜」という小さな声量の応答が返ってくる。波菜は砂遊びをするつもりらしい。

凧人が苦笑して、一人掛けのソファに腰を預けて一先ず波菜が降りて来るのを待つ。

「あの？」

凧人はあくまで平然としていた。一人ポカーンとする陽亜の視線に漸く^{ようや}気付き、彼は後頭部を撫でながら笑う。作り笑いではない。

「何が、何なの？」

騒々しく居間に駆け込んで来た割にはやけに落ち着いている。彼は特別深刻そうにしている様子はない。

「黒い雲が珍しいな、と思つて」

「……それだけ？」

居間に来た時の雰囲気と雲に対しての感想が何処か矛盾している。陽亜は途端に拍子抜けしてしまって、ため息についてカーテンを閉める。

「吃驚^{びっく}させないで」

呆れ顔で夫に文句を言う。陽亜は彼の向かいにあるソファに座り直し、肩を透かした。

「じゃあどうして走って来たの？」

「シャドウ君が波菜に見せたい物があるみたいで、早めに連れて来てくれるようにと頼まれたんだ」

シャドウとは、陽亜達の近所のグレイド家に住む少年の名で、波菜の友達である。波菜より一つ年上で、二年程前から二人が共に遊ぶのは日課となっていた。

「新しい本でも買って貰ったのかな」

思っていたより風人が急いでいた理由が大した事ではないと知って、陽亜は胸を撫で下ろす。

「何かあったのかと思っただじゃない」

「不安にさせたか？ 悪かったな」

思えば風人は陽亜が出会った頃からこうだった。細かい事でも大袈裟な態度をとる事が多々あるのである。陽亜が彼のそんな明るい所に惹かれたのは事実だ。しかし 一応稀にだが 変な所で無駄に胸の鼓動を高鳴らせなければならなくて、心臓に悪い時がある。困ったものだ。

「でも、奇妙^{おか}しいには違いないわね」

咄嗟にカーテンを閉めて外の様子を隠してしまったが、何かが起こり得るかもしれないという予感はどうしても拭えない。

「ああ。私も別に知らんぷりするつもりはない。ちよつと村長に会いに行つて来る」

「確かめられるの？」

「分からないが、念の為」

陽亜は頷く。村の長に訊いて必ずしも黒い雲が現れた原因が分かるとは断言出来ないが、確認ぐらいはしておきたい。

「悪い予兆ではない事を祈ろう」

「ええ、そうね」

不可解な事が起こりもするかどうか分かっていない時に、不安になっても仕方がない。

白いレースのカーテン越しから漏れる、居間を明るくしていた日光が雲に隠れて大地に日陰を作る。すぐに日光がまた姿を現してくれるといういつもの安堵が何故か出来ず、陽亜の心臓が確かに大きくトクンと鳴った。

バタバタバタ……

階段を駆け下りる音がする。二歳になるまでは軽い足取りに聞こえていた走りは、今では廊下中を響かせる程大きくなっていった。

颯爽と波菜が現れる。

「じゅんびばたんよ!」

「じゃあ父さんで行こうか」

「うん!」

波菜は両手を拳にし、大きく頷いた。拳にした手を口元に当てて、如何にも喜んでいる様子が窺える。

「陽亜、波菜をシャドウ君の家に置いて来るついでに、村長の家に行く」

子供思いだ。村長の家に行くのが、“ついで”なのである。

「私はすぐ戻れると思うから、陽亜は家に居てくれ」

「それは寂しいわね」

「じゃあ、おかあさんもシャドーの家にいこう!」

波菜が母を一人にさせまいと提案する。だが陽亜は笑って、首を振った。

「フフ、大丈夫よ。私は二人の帰りを待ってる」

「何だか済まないな」

「いいわよ、行つてらっしゃい」

凧人は立ち上がり、明らかに盛り上がり、引き千切れんばかりにギョウギョウ詰めになれた麻布の鞆を肩から腰に紐に繋いで引っ掛

けている波菜の手をとる。

「行つて来ます。留守を宜しく」

「いつてきまーす！」

波菜はかなりご機嫌で、見ている方が自然と顔を綻ばせてしまう。玄関で外に出ていく二人の背中に向かつて陽亜は手を振る。

「行つてらっしゃい」

微笑みながらもう一度、夫と娘を見送る挨拶を口にした。

今朝の風は少し強い。

所々に凹んでいる三つの大きな岩と小石がコルク色の地にめり込んでいる。岩達は散らばる様にある程度の距離を作り、その横を一つの人影が通り過ぎていった。

石庭を歩いている筈なのに、彼女は足音一つ立てずに足を一步一步踏み入れている。その優雅な動き。

彼女は開いた扇を胸の前で留めて置き、満足気に屋敷の敷地内にある庭の全貌を眺めた。

藍色が少し混ざった白い長髪と、マリンブルーの瞳が生まれ持った美しいその風貌によく似合い、無地の真つ白な振袖までもが彼女の華奢な身体を一層輝かしく見せていた。彼女の頭の“ある部分”が、キラリと光った。

彼女はふと、石庭の中央で立ち止まる。すると彼女が履いている下駄の鼻緒にピチャリと水滴が落ちて来た。

その水滴は上空から落ちてきたようだ。徐に上を見上げると、怪しい程に真つ黒い雲が目に残まる。今度は彼女の目に水が飛び込んできた。

ポツリ、ポツリと水が石庭の地面までも濡らしてきている。
「主様！」

彼女は自分を呼ぶ声を聞いて、縁側で待機している男の方を振り返る。

「主様、お身体が濡れてしまいます。早く中へ」

「せっかちなえ」

彼女はほんの少し頬を膨らませ、早足で屋根の下へ移動する。

ポツポツと降り始めたばかりの雨は、数秒してすぐに石庭の岩を叩き付ける程強くなっていた。

彼女は縁側で腰を下ろす。

「中へ」

「いいわ、ここで」

部屋の中へと促そうとする男に拒否の返事をする。

仕方なさそうな表情で、男は彼女の後ろで背筋を真っ直ぐ伸ばした状態で立ち尽くした。

「通り雨でしょうか」

「だといいわね」

気の抜けたような言葉で返す彼女は、畳んだ扇を帯の裏に仕舞った。

「つい最近今年の桜が全部散ったばかりなのに、もう雨の季節なのかしら」

彼女は不服を漏らすが、背後に居る男は目を伏せながらただ黙って主の言葉を聞くだけだった。

彼女は横髪を耳の後ろにかけると、もう一度空を見る。先程も、奇妙だと思っていた黒い雲の周りには、晴れの日以外に普通に見られる灰色の雲が泳いでいる。まるで突出しているかの様な場違いの黒い雲を見て、眉を顰めずにはいられなかった。不気味ささえ感じてくる。

彼女の心臓が大きく鳴った。

ドクン。

「？」

当然だが、男の耳には彼女の心臓の音など聞こえていない。

彼女はそつと片手を胸に当てる。

「朱怜^{しゅれん}？」

「はい。主様」

男は身体を少し前方に傾けた。

「今年は、無事に年を越せるかしらね」

「？ 何故？」

「いえ、聞かなかった事にして頂戴^{さあじやうだい}」

「……瑠琉胡姫様」

朱怜の彼女を呼ぶ声に、瑠琉胡姫は振り返る事も、応える事もしなかった。

第三話

光の世界。

本来闇に包まれし彼には何の関係もない世界である。関わった所で、きつと自身に害しか及ばないだろう。

それが分かっていても尚、彼はその世界を見つめた。

何処まで広がっているのか計り知れない、太陽によって煌めく大海原。水と土に恵まれた深緑の森。これから夏の季節がやって来る筈だが、春吹く風が大地を包み込む様に、未だ暖かな空気を運んでいた。

山や谷、森を超えた先には街がある。

耳を傾けずとも、微かに聞こえてくる人の声が妙に楽しそうだった。

同時に不愉快だった。

光の大地に身を置く生命達が、憎くて溜まらない。今からでもこの鬱憤^{うづぶん}を奴らに向かって晴らしてしまいたい。

光の世界の者達は、いつか闇の世界を滅ぼそうと考えている。彼には分かる。

彼らは闇を絶対的に否定しているからだ。光こそが正しい。闇は暗黒で、失われるものはあっても、得られるものは何もないと考える愚かな生き物達。自分達の中に眠る邪悪な感情を棚に上げ、悪魔の存在を認めようとしない。

人と悪魔は何が違う？

彼にとっては、本物の悪魔より何より人である者達の方が悪に見えるていた。

もし彼の世界が失われ、光の世界だけが残ったら　？　考えるだけでも悍^{おそ}ましい。

殺してしまいたい、殺せばいい。やられる前にやればいい。その感情は自分の中に眠る思いが蓄積し、生まれたものだった。

だが何ともなしにある日突然生まれた感情ではない。

彼の背中を押す影があった。

「憎いか」

深淵なる闇の中で反響する声。彼はそれを聞いて、すぐさま後ろを振り返る。だが声の主の姿は彼の眼には映らなかった。

その者は、文字通り闇に溶け込み、姿形を失ってしまった悪魔だった。

彼は怪訝な視線を容赦なく悪魔に向ける。

「お前はどうしたい？」

彼が答える間もなく、その悪魔は彼に問うた。

「憎い？ 何が？」

「私達が憎むべき存在、呪うべき存在は、昔も今もたった一つだろう」

(……『人』)

二人の悪魔の会話がここで漸く繋がった。同時に、心が通い合わさった。

そう。彼は『人』を恐れている。

彼の住む世界には『人』は存在し得ない。だが月日が流れる内に、人が住む世界と彼の世界が繋がるうとしていたのは明らかだった。

それが恐怖の根源だった。自分の生きる世界が他の世界と繋がる。ただでさえ得体の知れない生物が、自分達の領域に足を踏み入れてくると思つと、恐怖に震えずにはいられなかった。

怖い。怖い。怖い。

その一心だった彼は、光の世界を覗いた事さえなかったのだ。

彼を覗き込む悪魔は、重々しい口をゆっくりと開く。

「お前はまだ『人』に対し、怯えているようだな」

「やめろ。その名を出すな」

「聞くだけでも厭か」

「その名を出すな！」

彼の凶器になり得る鋭い黒い爪が、彼の眼の前で悪魔に突きつけられる。否、その悪魔は身体が存在していないので、相手にとっては威嚇にもなっていないのかもしれない。

「……お前がどれだけ抵抗しようと、いずれ世界は繋がる。それが我らの運命なのだ」

言わずと知れた事だ。

どんなに嘆いても、運命には逆らえない。生まれる前から必然的に決まっている自らの運命は、どうやっても避けられない。逃げられない。

「だが、我らは止める事は出来ずとも、動かす事は出来る」

意味が分からなかった。

「何を……ッ」

「私にはお前の力が必要なんだ」

急に親しみを籠めたような口調へと変わり、彼は一瞬戸惑った。

彼は突きつけた爪を仕舞い、腕を下ろす。

悪魔の口の両端が吊り上がる。

彼は無意識にゾツとした。背筋に生温い汗が伝う。こんなに近くにいても相手の身体全体がまったく捉えられないのに、彼は目の前の悪魔の“何か”に牽制され、石化した。

悪魔はさらに言葉を続ける。

「私はもう力がない。腕も足も、何もかも全て『人』に奪われてしまったからだ。私の望みを叶えてくれるね？」

低い声が、彼の耳に響く。

「……貴方の望みとは」

「君と同じだ」

何故同じ思いを持つ者同士だと断言出来るのか、彼には分かっていた。

紛れもなく、お互いに、闇の世界に生まれし悪魔の一人だったからだ。

憎き者。滅ぶべきもの。彼は恐れるよりも、まずはそれを望むべ

きだったのだ。

内なる闇が己の中で広がった瞬間、
彼もまた、真一文字に結んでいた唇を吊り上げ、薄く笑った。
混沌とした黒い雲の狭間から、紅い閃光が大地に放たれた。

第四話（前書き）

漸く、始まりの鐘が鳴ります。
もうすぐです。

第四話

闇黒あんこくに染まる世界。

繋がれし光と闇。だがそれは決していいものではなかった。

僅かな希望も見い出せないまま、魂が闇の奥深い所へと沈んでゆく。

光が闇に染まるのは簡単でも、闇の中で光を取り戻す事は困難だ。星一つないただ黒いだけの大空を見上げれば、その黒い空に身も心も飲み込まれる錯覚に陥る。

早く夜が明けて欲しいと、願うばかりだった。

隙間と呼べる程度に開かれた窓から吹き抜ける風が、波菜の頬を撫でる。

何度か瞬きをし、寝起きの目を覚醒させる。波菜は真っ白い毛布と枕がスーツの上に敷かれている、如何にも簡素なベッドから起き上がった。

「……厭な夢」

片手を額に押し付け、不機嫌そうな声を漏らす。これ程目覚めが悪い朝はない。

そんな彼女の心情とは逆に、早朝の空は、一点の曇りもない鮮やかな青色だった。

波菜は衣類の収納棚から、上半身から膝下まで一つに繋がっている藍色がかった黒い服を着て、階下に下りる。

居間でパンとミルクのみという軽い朝食を終わらせると、昨日摘んだばかりの花々の茎の部分を、布で覆って包む作業に取り掛かる。花束にしたそれを、植物性の細いひもを編んで作られた茶色い籠にそっと入れた。

波菜は籠の取っ手を持ち上げ、外に向かう。

外に出た途端に、朝の心地良さを感じさせる涼し気な空気が彼女の身体を包み込んだ。寒い季節はとくに過ぎていたので、それ程身体が冷える事はない。

波菜は一人、目の前に広がる森の中に足を踏み入れた。

森の丁度中央には、二つの墓石が建てられている。だが高さは、今年で十六歳の少女である波菜の膝より少し高い程度だった。岩と呼ぶよりも石板と呼ぶ方が近い。墓石には波菜が読めない文字で、文章が書き連ねてある。

半刻程歩いてようやく着いた墓石の前で、波菜は立ち尽くす。持参した花束を二つの墓石の中間辺りに置くと、その場でしゃがみ込んだ。

「おはよう」

目の前には誰も居ない。彼女の朝の挨拶を返す声はない。居るとするならば、それは墓下に埋まる二体の屍しかばねだけだ。

「ごめんね。命日以外には中々来れなくて」

それ以上は、言葉を紡ぐ事は出来なかった。今更彼らに伝えられる事は何もない。彼らが波菜の目の前から消えてすぐに、流せるだけの涙は流してしまつて、数年経つた今は、寂しいという感情表現が乏しくなつてしまつているのかもしれない。

（どうして……？）

悲痛に感じるだけの疑問は、波菜の心を強く締め付けるだけだった。

波菜が帰路を辿り、森を抜けて家に辿り着くと、すぐさま異変を感じ取つた。

家を物色する影がある。波菜は居間に入り、籠を音を立てない様、静かにテーブルの上に置いた。

だが勝手に家に入り込んで来ている者は何の躊躇ちゅうちよもなく、ゴソゴソと大きな音を立てている。

泥棒になり切るのなら馬鹿以外の何者でもない。そもそもコソ泥の真似事をする事自体愚かなのだが。

波菜は気付かれない様に、慎重に影に近付く　ようにしようと思つたが止めた。ここはそもそも自分の家なのだから、何故こちらが隠れるような真似をしなければならぬのか。思つて馬鹿馬鹿しくなり、堂々と影の後ろに近付いた。

腕を組みながら仁王立ちして、まず一言。

「そこで何をしているのかしら」

波菜は背中を見た時点で、それが何者かは分かつていた。常日頃から見慣れている後姿だ。分からない筈がない。

影がおそろおそろ後ろを振り返り、波菜と視線を合わせる。

「……もう帰つて来たの？」

「ええそつよ。不法侵入者」

波菜の正義の鉄槌が、一人の少女の頭にぶつけられた。

「痛い、痛いよお」

少女は叩かれた頭を抑えながら半泣きする。

「ふーん。誰が悪いんだか言つてみたら？」

「……波菜家のおやつを盗もうとしたあたしです」

「正解」

学び舎の授業で問題が解けた時、先生が生徒を褒める口調とは随分異なる。明らかに怒りを露わにしており、嫌味たつぷりの物言いだ。

「もうちよつと、手加減してよね」

未だに少女は頭をさすつて、痛みを抑えようとしている。

「犯罪者に容赦する程、悪人じゃないわ」

「それ、遠回しに自分の事、善人って言つてる？」

「どう考えても、不法侵入する方が悪いでしょう」

「そつちにだつて落ち度はあるよ。鍵、掛かつてなかったし」

「掛けてたわよッ！」

もう一度波菜は少女に拳をお見舞いした。

確かに出掛ける前、波菜は玄関の鍵を掛けた記憶がある。物忘れが激しくない、どころか波菜は物覚えが良い方だ。

早朝に出掛けた波菜は、空気を入れ替える為に家中の窓を開け放す時間など要さなかった。唯一開け放たれた寝室の窓も、起き上がってからすぐ閉めた。

つまり少女は、完全に犯罪になり得る方法で、家の中へと侵入した事になる。

「いやいやっ。合鍵だよ。合鍵！ 覚えてない？ 波菜、あたしに前、『いつでも遊びに来なさいな』って言って渡してくれたの」

「まったくキオクにゴザイマセン」

そろそろ堪忍袋の緒がはち切れる直前だった。波菜の怒りはまだ治まっていない。察知した少女は観念して、波菜の前で土下座する。

「わーん。ごめんなさい！」

「……絵美、今日は絶対に、死んでも、アンタに昼食も夕食もやらないからね」

絵美と呼ばれた少女は、涙腺を緩ませながら懇願する。

「そ、そこは何とか……」

「うつつるさいッ！！」

三度目の拳骨が炸裂した。

懲りる、という言葉は果たして絵美に効くのだろうか。波菜は甚はなはだ疑問に思う。

「お願いっ。あたしが悪かった。この通り！ 波菜様！」

良い音を立てて手を合わせる絵美を暫く睨んでみると、このまま眉間に皺を刻んだままにいるのが面倒臭くなって、波菜は絵美に背中を向けて居間から出ていく。

その後を絵美が追う。

「……怒りは静まりました？」

「アンタ、少し黙っててくれる？」

「え、じゃあどうしたら許してくれる？」

絵美にとっては、このまま波菜にご飯を貰えない事は重要なよう
だ。頼もつとしている時点で意地汚い、という事を波菜は言葉にし
ないで、そのまま呑み込んだ。

「洗濯、庭掃除、それから買い物」

「……………」

「返事は？」

「やりますッ！」

返事だけは威勢が良いから、中々どうして憎めない。とりあえず
波菜はそれで友人の悪行を許す事にした。

「あ、波菜。そういえば」

「^{ほいつ}簾ならあっち」

波菜は廊下の突き当たりにある物置を指差した。

「やるよ。じゃなくて、森に行ったんでしょ？ 大丈夫だった？」

「……悪魔になら遭遇してないわ」

「そう、ならいいけど」

絵美は波菜に笑顔を見せてから、自前の掃除用ではない簾を近く
の柱に立て掛け、物置に向かった。

第五話

藁箒わらほうしを右手に持ち、くるりと身体を反転させた絵美が玄関でブーツを履いて外に向かう。

家の周りがほぼ森で囲まれているせいで、本来は掃除を始めた所で、落ち葉を掃いてもキリが無いのだが、昨日波菜が念入りに落ち葉をかき集めたので、今回に限っての庭掃除は長く掛からないだろう。

案の定、絵美は波菜が一杯目の紅茶を飲み終えた途端に、少しだけスカートを煤だらけにさせた状態で居間に戻って来た。

「よしつ。これで昼食分は働いたよね？」

鼻高々に仁王立ち。

「んな訳ないでしょ。そうね。今のでスー一杯分ってトコかしら」

「そんなんじゃないよー」

絵美は頬を膨らませて頂垂れた。

「次は買い物よ。早く行きなさい」

波菜が服の左ポケットの中を探る。その時、絵美の茶色い瞳がキラキラと光り始めた。

絵美は両の手のひらを波菜に向かってバツと差し出す。僭越せんえつな態度に呆れながらも、波菜は片方だけの手に銀貨一枚を握らせた。

「んじゃ、魔女っ子絵美ちゃん行って来まゝす」

「余計な物買つて来たら、ただじゃ置かないからね」

「努力するよ」

必要以上に買う事は最早前提なのか。波菜は少しだけ眉を吊り上げたが、絵美の煮え切らない応答に対して返事はせずに、そのまま見送った。

野菜等の食材を買って来てくれれば何を作っても良い。買い物が済んでからもそれなりに絵美を扱こき使う気は満々なので、その分彼女に献立は委ねるつもりだ。

波菜の家は丁度丘の上に位置している。だが丘自体はそれ程高くはなく、緩やかな坂を下れば半刻も経たずに平野部に辿り着く事が出来た。平野部では、市場が毎日朝早くから夕方まで開かれている村があり、波菜は食料を調達する際に度々その村に行くのである。

ところで、絵美がその村まで行くのに足を使っているとは波菜は思っていない。何故なら、彼女は“人間には到底使えない手段”で常に行動しているからである。

波菜は開け放された玄関の扉の外に足を踏み入れ、後ろ手で扉を閉めた。

まだ外の空気は涼しいはまだ。これから暑い季節がやって来る。

(……丁度この季節だったわね)

遙かの昔の記憶が、微かに脳裏を横切る。思い出したくないもないと頭では感じている筈なのに、少しでも頭の中で記憶が蘇よみがえれば、自己嫌悪に陥るまで止まない。記憶とは生き物としては大変便利で不可欠なものだが、時には厄介なものにもなり得る。

(消えないという事は、忘れられないという事だわ)

しかも厭な事程覚えているものだと言うのだから、頭の中で広メモリーがる回想は、メリットよりデメリットの方が大きいのではないだろうか、とつくづく考えてしまう。

波菜は首を振って、忌まわしい記憶を無理矢理頭から追い出した。革のブーツの裏で深い青緑色の草を踏み潰す音がやけに大きく聞こえるのは、不気味に思えるくらいこの静寂のせいだろう。波菜が知る限り、丘の上に住む者は彼女以外ただの一人も居ない。丘を下れば真っ先に村に着き、上に上れば山道に入るが、家が建てられる規模の土地はない。木々を倒せばそれなりに土地は出来上がる筈だが、今の所山の中で住もうと思う者は居ないのである。

ならば森の中なら、と考える者こそ居ない。波菜の家周辺の森は、『シリスの森』と呼ばれる。即ち神の領域と呼ばれる『神明の森』だ。

宗教でいう神の付き合い方は「近過ぎず、遠過ぎず」と言われ、

神域である森の中で『人』の住宅を作る事は神域を穢す事に等しい。だから人がシリスの森に移り住む事は皆無だ。波菜を除いて。

波菜は十三の時に、シリスの森に一戸建ての小さい家を建てると決めた。だが勿論その時は、周りに拒まれた。終いには修道士まで呼ばれて、説教させられる羽目にもなった。が、波菜は堂々と修道士に言い返したのである。

「森の中には変わりないわね。けれど森の中は木々が囲まれていない土地が一つぐらいあるでしょうよ」

「何が言いたいのですか」

修道士は容赦なく波菜を睨みつけた。だが波菜の方は、相手が修道士でもまるで意に介さない様子だった。

「要するに、“神域の木々を倒さずに建築さえすれば穢す事にはならない”んじゃないかしら？」

木々ならともかく『地面』ならば、神域の地と、神域でないごく普通に点在する住宅地の地は同一化しているので、緑を避けた場所なら文句はないだろうと波菜は考えたのだ。

十三の少女とは思えない口調に圧倒された修道士は、渋々言いながらも承諾した。

良く言えば巧みな話術で言い負かした。悪く言えばただの屁理屈だと誰も口に出さない。

それから波菜がこの孤立した空間に移り住んで三年経った。

絵美という友人が、毎日のように訪れる事に鬱陶しさが無いと言った嘘になる。だがそれを除けばとても環境の良い場所だと思つ。木々の葉の隙間から漏れる太陽の光、いつでも涼しい空気を与えてくれる木陰、草むらを掻き分けて森を探検してみれば、奥の花畑にも辿り着く事が出来る。まさに緑に恵まれし大地。ここが神の領域と呼ばれるのも頷ける。

しかし、一つだけ波菜の気に入らない所があった。それは、シリスの森が『神域』という所である。

波菜が移り住む前から、シリスの森は当然、神の領域と呼ばれ続

けていた。だから波菜は、人々が森を神域と呼ぶ事是否定など出来ない。分かっていても尚、彼女は『神』や『神を崇める行為』を嫌う。十年前、否、既に十一年前となるあの日から。

波菜が信仰を嫌いになったと同時に、魔光界も変わった。

森の奥を進む度に足取りが重くなるのは、十一年前までこの世界に『居る筈のなかった生き物』が森の中に居る事を確信しているからだ。波菜とて、その存在に不安を覚えずにはいられない。

「神の住処すみかもあつたもんじゃないわね」

波菜は草むらと幹を避けながら歩き、一人ごちる。周りには誰も居ない。寧ろ何も居て欲しくない。居た所で、それが『人』である可能性は低いだろう。

波菜はそこに何かが居るかもしれないという可能性を考えても、たまに森の中を一人で歩きたい時があつた。今がその時だ。最初は絵美が庭掃除を適当に終わらせていないかを確認する為に外に出たのだが、目に飛び込んでくる森の方に視線が行ってしまい、急に散歩したい衝動感に駆られてしまった。ここまで来たら、後は何事もなく散歩を終える事を一心に祈る他ない。

ガサガサッ

急に、草むらが揺れた。だが揺れたのは本当に一部分の草むらだけで、周りの木々はまったく以て揺れていない。つまり、風ではない。よって、波菜の願いはここで打ち砕かれたのだ。

「そんな……」

早朝の墓参りの時には遭遇しなかったのに、まさかここで出会う事になるうとは。稀まれではなくこういう事はしょっちゅうだ。だから波菜は決して驚く事はないのだが、絶望に似た気持ちが入み上げてくるのである。

草むらの向こうに居るのが小動物に分類される魔物ならいい。しかし確率からして、波菜の予想は見事的を射てほしくない所での中

するだろう。

波菜はそれをすぐ目の前で確かめるのがどうしても拒まれて、とりあえず草むらから早歩きで後退り、針葉樹の幹の後ろに隠れ、遠くから草むらの向こうを窺った。

人の姿のようなものが波菜の翠色の目に映る。だが“それ”は人にはなり得ない、獣のように尖った耳に、コウモリのような翼を持った、全体的に姿形が薄黒に染まっている生き物だった。

人々はこれらの存在を『悪魔』と呼ぶ。

波菜は幼い頃から一体何度、見るだけで寒気が起きる恐ろしき生き物に遭遇したのだろう。いつもその時は家に閉じ籠^{こも}っていたら良かったと思い、自分を責め立てるのだ。

波菜は経験上、悪魔と目を合わせなければ、奴らの牙のような歯や蹄^{ひづめ}で襲^襲われる事はないと知っていたので、そのままその場から離れる事に決める。

（気付かれない様にしなければ）

悪魔はどれも薄黒い身体という点で違いはないが、身長や体系は一匹一匹が多少異なる。羽根の色が黒ではなく紅い者、体毛が異常に毛深い者、体格が大きくて耳が小さい者など。今波菜が見ている悪魔は、体格は痩^やせ細^こって、耳は尖^{とが}っているが大きさは普通の人とそう変わらない。反応が鈍く、聴覚に優れていない悪魔だと窺^{うかが}えた。波菜はほんの少し胸を撫^なで下^{くだ}ろす。こちらの姿をなるべく悪魔の視界に映らないように警戒し、屈^{かが}もうとしたその瞬間、

「！？」

信じられないものを見た。思わず波菜はその場で固まる。

悪魔の視線の先に何かが居る。

人だ。波菜は微かに人の黒髪を見た。木の陰からでは悪魔の上半身しか殆ど見えないが、その悪魔の鋭い視線の先を追うと、人が木に凭^{もた}れ掛^かかった状態で座^まっている。

よく目を凝らすと、その人は波菜とそう歳も変わらないであろう少女だと判断出来た。

（あの子、何をしているの）

早く逃げて、と波菜は大声を張り上げそうになったが、ここで悪魔に見付かると、今度は波菜の方が厄介な事になる。正面から襲い掛かれたら、恐怖で足が竦み、動けなくなるかもしれない。

だが何もしなければ、あんな下級な悪魔でも少女が殺されてしまう事も有り得た。

助ける他に手段はないと、頭の中で良心と正義心が訴えている。

（正面からではなく、横から……不意打ちなら）

波菜は脳内で単純な作戦を練ってから、服の右ポケットの中に手を突っ込んで、一枚のカードを取り出した。

そして取り出したカードを人差し指と中指の間で挟み、一つの言葉を唱える。

「『ラエンジェル』！」

波菜が大きな声でそう言い放った瞬間、カードが彼女の手の中で白い光を放つ。光は悪魔と少女の方まで広がった。

「グッ……ギャアアア！」

すると、光を浴びた悪魔が雄叫びのような悲鳴を上げる。悪魔は目を抑え、終いには顔全体を両手で覆い、その場から走って離れて行った。

悪魔が逃げた途端にカードの光が収まり、波菜は安堵で息を吐く。カードはポケットの中へとそっと戻した。

「やっぱり、光程度じゃ追い払えるだけか」

呟いて、波菜は悪魔が居なくなった事を確認し、少女の方へと駆け寄る。見た所、襲われた形跡はない。間一髪だ。

「もうっ、貴女どうして逃げ……っ」

なかったのかと訊こうとした瞬間、それが無理だった事に気が付いた。

（この子、目を開けていない……）

波菜は少し顔を蒼白させる。そんな訳がないと頭の中で全否定を試みながら、震えた指で少女の呼吸を確かめた。

「！」

よかった。とりあえず死んでいる訳ではなさそうだ。

悪魔の姿を見たせいで、気を失ってしまったのだろうか。そんな風に精神が弱い者も居る。大人の中で居たとしても、何ら不思議ではない。

波菜はしゃがんで、暫くその少女を観察する。

肩に少しかかるくらいの長さの黒髪は、木に寄り掛かっているせいか乱れている。顔自体は幼さが残るが、可憐な少女と呼べるくらいには顔立ちは整っていた。

着ている上半身の無地の白い服は、森の中で彷徨っていた割には汚れ一つなく、袖は肩より少し下までしかない。寒そうだ。下半身もまた、短い薄い青色の半ズボンで、波菜が見た事がない布生地が使われている。何の糸を使っているのだろうか。

そんな事よりも何よりも、少女は裸足だった。素足のまま、靴を履かずに何故こんな森の中に入ったのだろうか。

多くの疑問ばかりが募る中、突風によって、波菜の横髪が視界を遮る。森全体が揺れるように、ザワザワと緑が音を鳴らした。

まだ昼にもならない筈なのに、急に辺りが暗くなったように感じられて、この場で留まっているのが怖くなる。

「……どうしましょうか」

波菜は膝を上げて立ち上がり、黒髪の少女の長いまつ毛を指で触れた。

第六話

淡い色を帯びた光の玉と、黒い色に塗り潰された闇の玉。否、玉ではなく只の球体だ。

無意識にその二つの球体に手を伸ばす動作を、彼女はすぐに止めた。

どちらを掴めば良い？

善悪を問われれば、どちらが善なのかは明らかだ。だが、彼女は自らの姿を明るくしてくれる光の球体にさえも、触れようとはしなかった。

（触れた同時に、消えてしまいそうで）

何故そう思ったのかは解らない。それでもはつきりとそう感じた。

パリンッ

色だけを帯びていた筈の光の球体は、硝子の様に割れて、彼女の目の前で砕け散った。

残るは、闇の球体のみ。

彼女は自分の姿を捉えられなくなった。たった一つの、ただでさえ儚い光が、触れてもいないのに突然失われてしまったからだ。

（厭……）

飲み込まれる。闇の深淵に。

剣呑の雰囲気醸し出す闇は、確かに彼女の身体を包み込んでいく。

「厭……止めて。厭」

最早、手探りでも何も掴めない。自由を奪われ、彼女に為す術は何処にもない。

「ああああッ」

ガバツ！

呼吸がやけに苦しい。今まで自ら呼吸を止めていたかの様に。たった今、肺に溜め込まれていた息を一気に吐き出したらしい。吐いても吐いても、まだ喉の辺りが解放されていないようで、気持ち悪くなった。

「うつ」

慌てて両手を使って口を抑える。

外の空気を吸いたい。

彼女はベッドから床に足を下ろした。

「え、ベッド……？」

ようやくと、今自分が居る所を把握する。

「私、寝ていたの？」

自問しても自答が出来ない。彼女自身、こんな昼間からベッドで寝ている自分の状況を理解出来なかった。

「民家、だよな」

彼女は辺りを見渡す。見慣れないので、自宅ではないのだろう。

「じた、く」

思った言葉がさらに疑問を重ねた。自分の家という感覚はしないものの、自分が帰るべき場所も思い浮かばない。

「じゃあ、ここは何処？」

訳も分からない質問を一人ごちても仕方がない。とりあえずベッドから腰を浮かすと、身体が少しよろける。すぐ傍にあったカーテンに掴まって体勢を立て直した。

（外に行きたい）

彼女は玄関を探しに、覚束ない足取りで家の中を徘徊し始めた。

ベッドのある部屋から廊下に出ると、すぐ目の前に、斜め下に行き着く真っ直ぐな階段があった。彼女がその階段に足を着けた途端、ギシギシと音が鳴る。穴が空く気配はないので、梯子よりは安全だろうか。どうやら階段の板は木材のみを使っているようだ。手摺がないので壁に片手を付けながらゆっくりと階下に向かった。

階下に到着してから階段裏を覗くと、そこは物置になっていた。階段が続いていないと言う事は、ここが最下階で一階らしい。

左右に道が分かれていたが、右の方が明るい。玄関の扉の隙間から漏れる光が一階を微かに照らしているのだ。彼女は右に曲がって玄関に直行する。

扉のノブを回して、外に出た。

容赦なく彼女の目の前に飛び込んできた光は、太陽だ。反射的に瞑った目を、右目から開くと、鮮やかな青色の空が確かめられた。

風が気持ち良い。光と風、自然の空気に触れた途端に心も身体の調子もあつという間に良くなった気がした。

感嘆の声を飲み込み、呼吸が落ち着いているのが分かる。

「綺麗……」

今、大地と天空が彼女の足下と頭上に存在している。当たり前な事が彼女を安心させる。

さらに正面を向くと、森の中へと誘う入り口が見えた。

「森？ 何でこんな所に」

とても不思議に思えた彼女は、吸い込まれる様に森の方へと足が行った。

進んだ先に、何があるのだろう。

「貴女、懲りないのね」

刹那、左方向から第三者の声が耳に響く。

彼女は声がする方向へゆっくりと首を曲げた。

すぐに目についたのはピンクの髪色だ。一つに束ねたその髪を三つ編みにして肩にかけ、上から下まで一つに繋がっている藍色の長袖の服が、大人の雰囲気漂わせる。と思いきや、よく見ると顔立

ちは幼い。十代後半という所だろうか。殆ど黒い服だとイマイチ色合いが少なく感じる筈が、ピンクの髪色と合わせた碧色の瞳が目の中の少女を充分輝かしく魅せている。

少女の口が再びゆっくりと開かれる。

「熱はないようだけど、まだ寝ていた方が“身の為”よ？」

「……………」

さらりと恐ろしい忠告をされた気がした。自分が置かれている状況を大いに知りたくなってくる。

「あの」

「立ち話をする気はないわ。中へ入って」

今、彼女が出て来たドアに少女が逆戻りする。

とりあえず外の空気を吸ったお陰で身体の調子は良好したので、彼女は言われるがまま家の中に戻った。

二階に行くのではないようだ。ピンクの髪の少女は階段と物置のすぐ隣のドアのノブを回して、中に滑り込む。彼女も続いて中に入ると、後ろ手でドアを閉めた。

起き上がりのせいか、最初のベッドの部屋を一望する余裕はなかったが、少し二階にあった部屋とは雰囲気が違う気がする。

ここには寝台はなく、小さな長方形の木の板を組み合わせて作ったテーブルに、同じ色の四人分の木の椅子が置かれている。さらに窓がドアと対面して設置され、後は何が仕舞われているかはこちらからは覗けない、大きな棚が隅に一つあるだけの、何処か殺風景な部屋だった。一応、窓に取り付けられたアイスグリーンのカーテンから、家庭らしさは感じられた。

彼女は出て来たドアと、もう一枚、西にもドアがある事に気が付いた。だが、先にはどんな部屋があるかなどの興味より、今は緊張感の方が勝っていた。

既に少女は彼女の向かいの椅子に座って、頬杖をついている。
「どうぞ」

少女は彼女に、すぐ目の前の椅子を手の平をこちらに向けて勧めた。

はい、と返事をしようとしたが、緊張のあまりか細い声しか出ず、結局無言で椅子に座る。少女の方は特に返事しない事には構わず、彼女をじつと見つめるだけだった。見られて、すぐさまたたまれなく感じてきて、彼女は身体を縮めて下を向く。

「私は波菜」

少女はおそらく、自分の名を名乗った。

「貴女の名前は？」

人の名を訊く時は自分から名乗るものだという教訓を、少女は正しく認識している。

彼女はゆっくりと顔を上げ、波菜を見つめ返した。

息を飲む。いや、今は自分の名を訊かれているのだ。収まらない激しい鼓動を抑える為、胸に手を当て声を出す。

「夏帆……です」

自分の名前を言うだけで精一杯で、夏帆は大袈裟に胸を撫で下ろした。

「『かほ』？ 短いわね。発音からしてもヒュウガの名前って事かしら」

「はい？」

「？」

二人して思わず顔を見合わせた。心底、二人共お互いに、相手の応答が変に思えたようだ。

「……………でしょ？」

「あの、『ヒュウガの名前』って何ですか？」

「え、貴女いくつよ」

夏帆は波菜に呆れた声を出されて、肩が少し飛び上がる。畏縮して再び俯いた。

波菜は夏帆が人見知りで怯えているのだと分かって、溜息をつき肩を竦めた。

「えーっと……じゃあ」

波菜は立ち上がり、棚を開けて何かを取り出す。テーブルに置かれたのは鳥の羽根がついた黒い軸のペンと、表面がザラザラとした触り心地の白い紙だ。

「ここに、自分の名を書いて」

波菜が机上で上にペンを置いた紙を、夏帆の方に滑らせて促す。

夏帆はそつとペンを取り、少し留まってから紙の真ん中に縦で『夏』に『帆』と書いて、『夏帆』という文字を書いた。

「これでいいです、か？」

未だに上手く喋れない。たった二文字を書いただけで息が上がる。『文字は書けるのに。何故『ヒュウガ』という単語が理解出来ないの？』

訊かれてもどうしようもない。文字は無論書ける。だが『ヒュウガ』は夏帆にとって、まったく聞かれ慣れていない言葉だ。一体何の事なのだろう。

「もしかして『読み』が出来なかったりして」

波菜がぼそりと呟く。波菜は夏帆が使った紙にそのまま、もう二文字白い紙に書き加えた。夏帆から見て逆さまの文字が正位置で見えるように、波菜は紙を反転させた。

「これ、読める？」

「……『はな』」

「これは私のヒュウガ字。『なみな』と読むわ」

「あ、成、程」

『波菜』と書いて『なみな』は分かったが、ヒュウガが分からない。だがその時、夏帆はやつと理解した。

「ヒュ、『ヒュウガ』って。国語の事ですか！？」

「ど忘れなのかただの無知なのか知らないけど、まあそうよ。国語っていうか地上ではたった二つにしか分類されていないけれど」
今一番の疑問を解決して、夏帆はやつと落ち着く。否、一番ではない。こんな細かい事が今知りたいのではなかった。と夏帆が

色々考えていると、波菜は再びもう二文字書いていた。

「じゃあ、これは？」

夏帆は何故だかもう何にでも応えられる気がして、両手を拳にしながらい、口をへの字にし、波菜の第四問目に挑戦する。

「『えみ』」

「呼ばれて遅れて、ただ今参上！」

沈黙。夏帆と波菜は途端に口を閉ざす。明らかに二人ではない、明るい一声が飛び出してきた、気がするが。

「幻聴？」

「お好きに解釈して」

夏帆は吃驚し過ぎて固まっているが、波菜は全然気にする様子がない。だが台詞から、夏帆だけが聞こえた声ではないようだ。ところで『参上』と言いながら姿が見えないのはどういう事なのだろう。ところが、不意打ちもいいところだ。

「ただいま帰りました　っ！」

「わあっ！」

夏帆は椅子ごと後方に身体が倒れ、背中を強く打ち付ける。今日一番の驚きだ。

「いたた……」

背中をさする。腫れてはいないだろうか。

「わわっごめんね。え　　っど？」

夏帆は声がする方向へ目を向けたが、大声の主の前に波菜が立ち塞がり、顔が見えない。夏帆はその時何かを感じ取った。波菜の背中から、黒いものが……。

「アンタ、私から一体何発喰らいたいの？　十発？　二十発？　お望みなら百発、買い物してくれたご褒美に進呈進ぜよう」

語尾が、奇妙しい。恐ろしい。

「ちよちよっ待って待って！　波菜を驚かすつもりだったんだよ！？」

「言い訳になつてない馬鹿野郎」

「あたし、野郎じゃないよ」

「いいから玄関から入って来なさ

ッい!!」

バシツバシツバシツ!

窓から離れて夏帆の腕をとって椅子に座り直させ、ただ腕組をして立ち尽くす波菜。先程の凄い音は一体何なのか、訊ける勇氣までは夏帆になかった。

「いやー、何かね。呼ばれた気がして」

「誰も呼んでないわよ」

今までの閑散とした雰囲気とは裏腹に、こちらの波菜が本性なのだろうと夏帆は納得する。

「あの、絵美さん？」

「絵美でいいよ。で、どなた？」

訊くのが些か遅い気がする。絵美は高い位置で二つに縛った長い茶髪を揺らしながら尋ねる。だが夏帆が答える前に、絵美が予想した回答を言ってみせた。

「波菜の隠し子かな」

まったく、的を射ていない。

「私がこんな大きい子供を持つような歳に見える訳？」

「だよね。こういうのを何？ 隠し妹って言うんだっけ」

「血が繋がっていない妹だと？ 言っとくけど、妹でもないわ」

「じゃあ姉だ」

「そろそろふざけるの、止めてくれるかしら」

絵美が来た所で一気に部屋の中の空気が変わり、会話がどんどん交わされる。二人の少女の漫才のような会話を、夏帆はただ呆然と眺めた。

「拾ったのよ」

「ふーん。波菜って、世捨て人とか拾っちゃうタイプなんだ」

「生憎、そこまで慈悲深くはないわね。悪魔に襲われかけてたから人として助けたまよ」

「成程ね。どーする？ 家の周りに結界、張つときましようか？」

「その分食料、多めに要求するじゃない」

「いいじゃん。魔力には穀物なんだよ。護衛してあげるんだから安いモンでしょ」

「安くないわよ。相当食費が嵩むのよっ！」

語尾の方を強めて波菜が言い放つ。会話の中で、やはり夏帆が知らない単語が出て来た。

（結界？ 魔力？）

数々の疑問が頭の中で回り、夏帆は目を瞬かせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6103v/>

魔光伝

2011年10月10日14時11分発行